



## 巻頭言

# 自ら行動するか外圧に頼るか

—博士の質の保証—

To act independently or to rely on external pressure

—Quality assurance for Ph.D.s—



**梶山千里** Tisato KAJIYAMA

独立行政法人 日本学生支援機構 理事長

自ら積極的に変化・行動するのでなく、外部からの動機付けや批判などの外圧により変化を促される例は多い。平成16年から始まった国立大学の法人化は、民間的発想の大学経営やステークホルダーを見据えた大学運営、さらに教育・研究の成果を社会に還元するなど、大学の変化を期待するものであった。これらの国立大学の改革は、法人化という外圧によって促されることなく、本来、国立大学自身が自ら進んで行うべきものであった。

日本の博士の学位の質保証に関する議論・検討がかなり長期間にわたって行われている。中央教育審議会の大学院部会でも博士の学位の質保証が重要な課題となっている。大学院博士課程に入学・進学してくる学生は、基礎学力を身に付けるとともに、高度な専門知識を修得し、研究者として相応しい問題提起・解決能力をみがくために、博士課程に在籍している。博士課程の学生は勉強するために大学院に入学・進学し、そのために学費を払っていることを大学教員が認識していないと、学位の質の保証は確保できない。換言すると、博士候補の大学院生は、基礎・専門学力の滋養が第一で、指導教員の研究の補助のために大学院に在籍しているのではない。

日本の博士課程修了者が、企業関係者にあまり歓迎されなかったり、欧米で日本の博士号があまり高く評価されていないのはなぜだろうか。博士課程修了者が最低限身に付けておくべき能力は、基礎・専門の学力と問題提起・解決能力の2点に絞られる。博士学位の質保証のためのこれらの資格を実質化するためには、基礎・専門学力のチェックのための筆記試験と問題提起・解決能力チェックのためのリサーチプロポーザルに対する試問の2つの資格審査を明確な基準に基づいて徹底的に行うことである。日本の大学では、博士号を取得するための資格要件が、学位の質の保証という観点からきちんと整備されていない。私は、工学系の課程博士の審査状況しか知らないが、博士の学位審査は、学位論文の提出とレベルの高い専門誌への投稿、さらに試問会での口頭試験にパスすることである。一般に博士の研究テーマは、指導教授から与えられることが多い。研究の進展と展開の程度は、学生の能力によるのはもちろんであるが、研究内容の難易に依存することもある。そのため、学位論文の完成度は、博士候補者の実力以外に運・不運に左右されることもある。一般に、日本の大学では、リサーチプロポーザルのような研究者としての資質のチェックはあまり行われていない。

本稿のタイトルにあるように、自ら実行できないときは、外圧に頼らざるを得ない。そこで、提案であるが、文部科学省が国立大学法人を実現したと同様に、課程博士の学位審査と資格要件を学位の質の保証という観点から、制度化してはいかがだろうか。日本という国は、何事も外圧がなければ短期間内に変化することができないことが明白であるからである。

英訳版は920ページをご参照下さい。English version, see pp 920.

© 2010 The Chemical Society of Japan